

「鹿児島県の近現代」教育研究センター

## 近現代センター通信

第3号 2024年3月

## —目次—

五代友厚と〈鹿児島県の近現代〉(伴野文亮)	1	平成時代の地方分権改革を振り返る(有馬晋作)	10
五代友厚のシンポジウムの感想(末岡隼)	2	ポツンと篠原國堅の墓(友野晴久)	12
連続トークイベント「#鹿児島県の女性02」(西村知)	3	鹿児島市小松原2丁目10番1号の歴史断章(永山修一)	15
沖永良部の近現代—沖永良部の現在—(澤田成章)	4	『大正三年1914 桜島大爆発の思出集』について(林匡)	19
アートと地域とまちづくり(太田純貴)	6	海音寺潮五郎文学における西南戦争(吉満庄司)	22
アートと地域と美術館(太田純貴)	7	戦艦金剛主計兵米倉重夫と親族(米倉秀一)	25
アートと地域と教育(太田純貴)	8	鹿児島県の近現代文学(3)(鈴木優作)	26
いま水俣病を考えること(中川亜紀治)	9	寄贈資料・今後の予定・編集後記	27

藩校造士館創立250周年・鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター  
 設立1周年記念シンポジウム「五代友厚と〈鹿児島県の近現代〉」  
 「鹿児島県の近現代」教育研究センター 特任准教授 伴野 文亮

2023(令和5)年10月29日(日)に、かごしま県民交流センター大ホールにおいて、藩校造士館創立250周年・鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター設立1周年記念シンポジウム「五代友厚と〈鹿児島県の近現代〉」を開催しました。

本シンポジウムは、第Ⅰ部「基調講演」と第Ⅱ部「トークセッション「五代友厚と〈鹿児島県の近現代〉」」の二部構成で実施しました。

第Ⅰ部では、八木孝昌氏(一般社団法人日本コミュニティカレッジ講師)と井上潤氏(公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館顧問)に講演をお願いしました。八木氏には、「五代の「弘成館」鉾山業一半田銀山をめぐる」というタイトルで、半田銀山(福島県桑折町)をめぐる五代の取り組みについてご講演いただきました。井上氏には「近代日本社会の創造者渋沢栄一の思想と行動～五代友厚との関係に触れながら～」というタイトルで、五代と同時代を生きた実業家である渋沢栄一の思想と行動について、途中渋沢の五代評にも触れていた

だきながらご講演いただきました。

第Ⅱ部では、メディアにおける「五代友厚」像の形成や、五代と鹿児島との関係をめぐる〈記憶〉の継承のあり方をテーマとして、多彩なゲストを招いて議論しました。登壇者は上記基調講演者に加え、田中光敏氏(映画監督)、寺尾美保氏(立教大学特任准教授)、下豊留佳奈氏(郷土史家)の3名をゲストとしてお招きしました。田中氏には、五代友厚を主人公とした映画「天外者」の撮影時のエピソードなどをお話いただきました。寺尾氏には明治期の島津家を研究されているお立場から、下豊留氏には郷土史家としてひろく鹿児島の歴史研究に携わっているお立場から、鹿児島の近現代史に五代を位置付けていく際に留意すべき視座についてご提言いただきました。

当日は、現地・オンライン合わせて約200名の方々にご参加いただきました。本シンポジウムの開催によって、今後五代友厚を研究していく際にポイントとなる認識について、国内外の多くの方々とは共有することができました。

## 五代友厚のシンポジウムの感想

法文学部人文学科2年 末岡 隼

「五代友厚と〈鹿児島近代〉」のシンポジウムは、これまで、政商としてあまり良い印象を持たれていなかった五代友厚について、視点を変えて考え直す試みでした。五代友厚はこれまで、政商、開拓使官有物払下事件など、歴史教科書などでは悪い印象かつ低い評価で書かれることが多い存在でしたが、今回のシンポジウムでは五代友厚の「英雄」としての側面を見出す講演やトークがたくさん行われました。また、比較として渋沢栄一の功績と五代の友厚の功績と比較して五代の功績がより鮮明化する試みも行われました。

このシンポジウムに参加して思ったことが二つあります。一つ目は、五代友厚はやはりこれまで言われてきたような悪い人、政商という言葉が持つ「政府とつながりのあるずるい人」とイメージの人ではないという事です。今回のシンポジウムでは、五代友厚の人柄や考え方がうかがえる史料がいくつか紹介されました。それを見ると五代友厚も、明治維新に名を連ねる薩摩の英雄と変わらない、日本の発展を願って行動した人だったことがよくわかりました。二つ目は、歴史の人物の評価は困難かつ一度世間で定着したイメージを払しょくするのは難しいという事です。歴史上の人物の評価や世間でイメージは、その人物が残した功績や人柄で決まると思います。しかし残念ながら本来評価されるべき人物が言葉のイメージや、何か一つの悪い出来事が広まることで世間での評価やイメージが悪くなってしまうことがあります。その典型例が五代友厚といえるでしょう。今回のシンポジウムに参加して、これまでの五代が正當に評価されていないことを嘆く専門家の先生のお話を聞き、一人の人物の評価を変

えるのは難しいことなのだと実感しました。難しいかもしれませんが、今回紹介された映画「天外者」、などのメディアコンテンツ、そしてこのようなシンポジウムをコツコツと積み重ねることが評価されるべき人物に正當な評価を与えることにつながると思いました。

日本のために動き、功績を残した人物が正當な評価を受けないことは、明治日本を検証する上で障害になるだけでなく、これからの日本を考えるときに過去の偉人から得られるヒントを見落としてしまうかもしれません。今回のシンポジウムは見落としていたものを拾い上げる貴重な機会といえると思いました。



## 「鹿児島県の近現代」連続トークイベント「#鹿児島県の女性 02」

「鹿児島県の近現代」教育研究センター 副センター長 西村 知

法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センターは、令和5年11月11日、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターにて「鹿児島県の近現代」連続トークイベントの第02回を開催いたしました。

第1部では、法文学部4年生の向吉瞭さんによる発表「鹿児島県の外国人が活躍するために」がありました。発表では、日本人と同様に自由に働くことができる外国人は、鹿児島県では、フィリピン人が最も多いことを統計で示し、外国人が活躍する鹿児島県の将来を考える場合、まずはフィリピン人に焦点を当てることが重要であると述べました。そして、フィリピン人は、語学力や明るい性格、農業経験を活かした業種で地域の経済に貢献することができるのではないかとその意見を述べました。また、鹿児島市の外国人サポート多言語アプリの「Kago Tips」を紹介し、鹿児島県や鹿児島市の多文化共生に向けた支援の重要性を強調しました。

第2部では、大隅半島で農作物の生産販売や雑貨販売に取り組まれている、ドウチ・アルマさんと、ニシムラ・ジョアンさんによるトーク「外国人女性の小規模ビジネス」がありました。お二人は、フィリピンの文化を鹿児島で広めることを目的とした任意団体「鹿児島フィリピン文化サークル」(KFCC)の会員です。ニシムラさんは、会長、ドウチさんは、副会長です。まずは、大隅半島の温暖な季候を活かし、モリンガや調理用バナナ(サバ種)などのフィリピンの農作物を生産し、インターネットを使い動画やSNSで販売促進している様子が語られました。次に、自宅の一部でフィリピンの食材などを販売する「サリサリストア」(フィリピン語で小規模

雑貨)についても語られました。お二人のトークの後、ニシムラさんは、ドウチさんの小規模ビジネスについて、従来型の対面販売にオンラインビジネスを、そのメリットとデメリットを理解したうえで効果的に組合わせている点で優れているとして高く評価しました。最後に、参加者からの質問やコメントなどが受け付けられました。行政書士の方からは、外国人がビジネスする場合、営業許可取得やビジネスのための公的資金の申請などにおいて、日本人のサポートが効果的であるとのアイデアを共有されました。

2つのトークのあと、「鹿児島フィリピン文化サークル」による、「バナナデザート試食会」が開催され、会場参加の皆様とフィリピンのバナナ料理に舌鼓をうちました。当日は、フィリピン語、英語、日本語が入り乱れて、大いに盛り上がりました。

#鹿児島県の女性 02  
外国人女性の  
小規模ビジネス  
「鹿児島県の近現代」連続トークイベント  
鹿児島大学法文学部附属  
「鹿児島県の近現代」教育研究センター

ドウチ・アルマ  
ビジネス・ウーマン  
KFCC副会長

新しい地域振興の形  
外国人女性と一緒に地域振興に取り組む女性を応援することを目的として開催いたします。イベントは日本語で行います。  
会場：国際島嶼教育研究センター1階会議室。外国人の方もどうぞ！

西村 知  
鹿児島大学教授  
KFCC 会長

向吉 瞭  
鹿児島大学学生

ニシムラ・ジョアン  
KFCC 副会長

バナナデザート  
試食会もありますよ！  
参加無料

2023年11月11日(土) 13:00~16:00  
鹿児島大学総合教育研究棟5階  
国際島嶼教育研究センター会議室



## 奄美群島日本復帰70周年記念 地域シンポジウム 「沖永良部の近現代—沖永良部の現在—」

法文学部法経社会学科経済コース 准教授 澤田 成章

法文学部附属「鹿児島近現代」教育研究センターは、本学国際島嶼教育研究センター、知名町、和泊町と共催で令和5年12月8日と9日の2日間にわたり、地域シンポジウムを開催いたしました。2日間の参加者は延べ80名以上でした。

12月8日には和泊会場（和泊町役場結いホール）にて、皆村武一鹿児島大学名誉教授による和泊町への寄贈図書のお披露目会が開催されました。開会と共にこれまでの図書寄贈に向けて鹿児島大学としてお手伝いさせていただくことになった簡単な経緯を法文学部澤田よりご説明しました。続き、和泊町代表者として竹下教育長から感謝が述べられました。その後、皆村名誉教授より高校卒業のタイミングで島を出てから今日に至る研究の足あとや、図書寄贈にあたっての故郷に対する想いについてお話しいただきました。皆村名誉教授の想いを受け、鹿児島大学として寄贈図書の利活用をどのように促進していくかについて澤田から改めてご説明し、最後は前登志朗町長に閉会挨拶をいただきました。



12月9日には知名会場（フローラル館）にて、トークセッションを中心としたシンポジウムが開催されました。同年3月に続く第2回として、沖永良部の現在という視点で、沖永良部に住む様々な立場の方のお話をうかがうことを主たるテーマとしております。沖永良部の過去から未来をつなぐ現在の立ち位置について、第I部 未来の沖

永良部に向けて、第II部 沖永良部に暮らすひとの現在、第III部 特別座談会「沖永良部と文学」の3部構成で議論しました。開会あいさつでは、Zoomを用いて丹羽謙治センター長から、沖永良部の産業、文化、ひとの取り組みを明らかにし、未来につなげていく活動への期待についてお話しいただきました。

第I部では、はじめに和泊町役場企画課長補佐兼脱炭素推進室長の永野俊樹氏より、知名町と和泊町が一体となって現在進めているゼロカーボンアイランド沖永良部の取り組み紹介がありました。続いて一般社団法人シマスキのメンバーから、島の若手の主体的な取り組みについて紹介いただきました。株式会社 Novelio 代表（鹿児島大学法文学部4年生）の宮田陸さんは在学中に自身が設立した会社のビジネスモデルについて紹介し、沖永良部には仕事がないのではなく、隠れた宝を効果的に活用する仕組みが整っていないだけではないかと投げかけました。



第II部は、沖永良部に暮らす人の現在に焦点をあて、「ずっと島にいる人たち」「島外から来た人たち」「国外から来た人たち」の3つの視点から、それぞれ島で暮らすこと、島ではたらくことについての議論を行いました。

一般社団法人シマスキのメンバーを中心としたパートでは、沖永良部で農業に携わる事業者は協力してブランドを育てる意識が強く、一体感を強みとして磨いていくこ

との重要性や、人手不足解消に向けた決意などについての議論が盛り上がりました。

えらぶ島づくり事業協同組合のメンバーを中心としたパートでは、コーディネーターの日高特任助教から社会学におけるヨソモノという概念と沖永良部におけるヨソモノについて前提共有があったのち、Iターンで来島して働く2名の若手のお話をうかがいました。「東京（都会）との生活水準の違いは感じない」「島で若手に割り振られる仕事が“作業”となっており、やりがいや自己成長を感じ辛い」といった、島外での社会人経験があるからこそその視点が際立ちました。

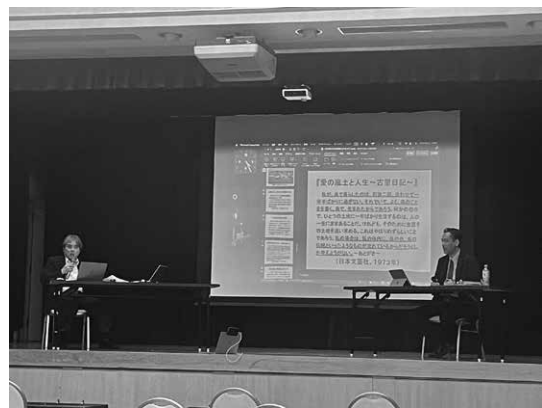
国外から来た人たちから見た沖永良部をテーマにしたパートでは、西村知副センター長が趣旨説明を行い、鹿児島県の中なかでも沖永良部は外国人の受け入れ人数が多く、またその歴史も長いこと、そのため多文化共生のトップランナーとして学ぶ点が多いことなどが説明されました。登壇したのは沖永良部2世であり、Iターン者として在沖永良部の外国人と島の人をつなぐ活動を展開しているネルソン水嶋氏と、介護施設で働きながら日本への帰化を目指す中国人の江氏のお二人です。介護の資格を取得した後も沖永良部に残りたいというご自身の目標や、「島の人たちには島に来たばかりの外国人に対してもっと親身になってあげて欲しい」といった希望についてお話いただきました。



第Ⅲ部は、特別座談会「沖永良部と文学」と題し、在野の研究者として長く沖永良部の経済・社会・文化の研究を続けてこれ

た知名町役場の前利潔氏と、鈴木優作特任助教による一色次郎に関するトークセッションを実施しました。

前利潔氏による冒頭のプレゼンテーションでは、一色次郎が生まれた時代の沖永良部がどのような経済・社会であったか、一色次郎に対して県内の新聞各紙はどのように取り上げてきたか、作品ごとの一色次郎の沖永良部への想いの変遷等について共有いただきました。



鈴木特任助教との対談の中では、一色文学の魅力や今後の沖永良部の文学に対する期待に光が当てられました。対談を通じて、一色次郎自身が沖永良部島への想いと父への想いの中で葛藤しており、それが一色文学の魅力を形成している点が確認されました。また、「東京空襲記」や「愛の風土と人生～古里日記～」といった作品では記録にこだわった側面もみることができ、記録という面で活躍した作家としての側面も一色次郎の魅力といえそうです。

プログラムの最後は、鹿児島大学法文学部松田忠大学部長より、総括と閉会の挨拶がありました。脱炭素の先進的な取り組みや若者の主体的な活動など、沖永良部は先進的な離島モデルを発信していくポテンシャルがあることが確認できたと、本シンポジウムの成果を総括するとともに、今後も末永く鹿児島大学の教育研究活動へのご理解とご協力をいただきたいと、沖永良部の方々の支援を呼びかけました。

## 「アートと地域とまちづくり」 (2023年10月27日@鹿児島大学ラーニング・コモンズ1) 報告

法文学部人文学科多元地域文化コース 准教授 太田 純貴

「地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト」の一環として、アートと地域とまちづくり、およびこの三者の関係について多角的に知見を獲得し議論することを目的に、トークイベント「アートと地域とまちづくり」を2023年10月27日(金)(於・鹿児島大学法文学部ラーニングコモンズ1)に開催した。登壇者は、藤浩志氏(美術家、秋田公立美術大学教授)、市村良平氏(株式会社スタジオグッドフラット 代表取締役/企画・プロデューサー)、四元朝子氏(サンカイ・プロダクション合同会社 広報/アートコーディネーター)である。

美術館と観光と経営、それらと連動する常設展やコミッションワークの可能性、街とのチャンネル作りとしての企画展(の重要性)、近代美術館/現代美術館/アートセンターの役割(の違い)、インプット/アウトプットにとどまらないアウトカムという視点、制作者/鑑賞者という二項対立を超える可能性を秘めた活動としての広報やファシリテーターなど、三氏からの話題は多岐に渡った。そのどれもが秋田や鹿児島、京都や東京等における具体的な活動や事例を通して語られ、アートと地域とまちづくりのための視点や問題意識を参加者全員で一定程度以上共有できたように思われる。

三氏の議論は多岐に渡っていたが、アート自体にも批判的な眼差しや一定の距離を保ちつつ、それでもなおアートの重要性をどのように語るのか/語り得るのかということを実践しようとした態度は共通していただろう。それは町おこしや地域おこしのためにアートを使うというような「道具と

してのアート」とは似て非なる態度、と言ってもいいかもしれない。本イベントは、アートへの批判的な態度は保持しつつ、アート自体の可能性や「楽しさ」、楽しさを原動力とすることに臆することなく正面から向き合う機会となったのではないだろうか。

「鹿児島の近現代」教育センター  
令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクト

# アートと 地域と まちづくり

2023 10.27 FRI 14:30 - 17:40  
(途中休憩あり)

一般公開  
参加費  
無料

**登壇者**  
藤 浩志  
美術家

**会場**  
鹿児島大学那覇キャンパス  
法文学部2号館1F ラーニング・コモンズ1

市村 良平  
株式会社スタジオグッドフラット  
代表取締役/企画・プロデューサー

四元 朝子  
サンカイ・プロダクション合同会社  
広報/アートコーディネーター

**コーディネーター**  
太田 純貴  
鹿児島大学法文学部 准教授

※ 駐車スペースには限りがあるので、可能な限り公共交通機関をご利用ください。

**申し込み方法**  
右の二次元コードから事前の申し込みが  
必要です。締切: 10/20(金) 15時まで



## 「アートと地域と美術館」

(2023年11月17日@鹿児島大学ラーニング・コモンズ2) 報告

法文学部人文学科多元地域文化コース 准教授 太田 純貴

「地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト」の一環として、アートと地域と美術館、および三者の関係について多角的に知見を獲得し議論することを目的に、祝迫眞澄氏（都城市立美術館学芸員）と宮蘭広幸氏（霧島アートの森学芸員）を登壇者に迎えたトークイベント「アートと地域と美術館」を2023年11月17日（金）（於・鹿児島大学法文学部ラーニングコモンズ2）に開催した。

祝迫氏からは、団体鑑賞や企画展「アルフォンス・ミュシャ展」の一環として都城市の高校生によるバナーデザインプロジェクトの開催、高校生による現代美術作家・高嶺格作品のメンテナンスなど、都城市立美術館と地域との関わりを示す事例を多数ご紹介いただいた。また、お話しいただいた都城市立美術館の歴史・前史は、東京という「中心」から宮崎という「周縁」への美術概念の伝播（をめぐる力学）や、地域の作家と地域の美術館の関係性を考える上で、極めて重要な事例となるように思われる。

宮蘭氏からは、パブリックアートやサイトスペシフィック・アートなどの概念を中心に、現代アートを理解するための文脈についてお話しいただきつつ、その文脈における霧島アートの森や収蔵作品、美術館がもたらす体験の位置付けについてお話しいただいた。同時に、大隅アートライブ展のような地域との関わり・対話、大寺聡氏のような地域のアーティストとの関係についても知見を得ることができた。これらは鹿児島と現代アートの関係を検討していく上で、有益な補助線となる。

本イベントで印象的だったのは、登壇者

のご発表に加えて、学生たちからの質問である。サードプレイスとしての美術館の可能性、作品売買が不可能な場所としての美術館に関する質問が、学生たちから提出された。これら以外にも、美学や日本近現代美術史、美術史と人類学の交差点において、継続的な検討に値する質問ばかりであったことは記しておきたい。

鹿児島市の芸術文化センター 令和5年度地域アートプロジェクト推進協議会

# アートと地域と美術館

美術館といえば、まずは作品や展覧会が思い浮かぶでしょう。しかし、美術館の役割や学芸員の方々の仕事は、作品や展覧会に限られる、もしくは受け入れるだけなのではないでしょうか。そして、作品や展覧会に関わるということも、実際のところはどのように関わっておられるのでしょうか。今回のトークでは、都城市立美術館の祝迫眞澄さんと霧島アートの森の宮蘭広幸さんと一緒に、「五つ星のまち」かもしれない美術館について特に地域との関わりを中心に話し合います。

日時  
2023年11月17日(金)  
14:30~17:40

会場  
鹿児島大学法文学部  
2号館 2F ラーニング・コモンズ2

一般公開  
参加費無料

申し込み方法  
下の二次元コードから事前の申し込みが必要です。

登壇者：祝迫眞澄（都城市立美術館 学芸員）  
宮蘭広幸（霧島アートの森 学芸員）  
モデレーター：太田純貴（鹿児島大学 准教授）

(スケジュール)  
14:30~14:40 趣旨説明  
14:40~16:00 登壇者による話題提供・意見交換 締切：11月10日(金)  
16:10~17:40 参加者全体でディスカッション 15時まで



## 「アートと地域と教育」

(2023年12月1日@鹿児島大学ラーニング・コモンズ1) 報告

法文学部人文学科多元地域文化コース 准教授 太田 純貴

「地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト」の一環として、アートと地域と教育、および三者の関係について多角的に知見を獲得し議論することを目的に、坂本顕子氏（熊本市現代美術館学芸員）と早川由美子氏（NPO 法人 PandA 理事長）を登壇者に迎えたトークイベント「アートと地域と教育」を2023年12月1日（金）（於・鹿児島大学法文学部ラーニングコモンズ1）に開催した。

早川氏からはNPO 法人立ち上げの動機からアートマネジメントへと至る経緯とその展開について、鑑賞者開発、機関誌の発行、展覧会等企画運営事業、ワークショップ事業、アーティストマネジメントとしての支援事業などの事例をご紹介いただきつつ、お話しいただいた。

坂本氏からは、「アートパス」「アートプログラム」「1年生カード」のような教育普及事業に加え、「街なか子育てひろば」「文化政策としてのご用聞き」「福祉と芸術」「認知症の方やそのご家族を対象とした対話型鑑賞」「フレンドリーオンライン」「やさしい日本語」への取り組みといったアートコミュニケーション、地域や行政との連携の事例についてお話しいただいた。

両氏の立場は異なるが、アートを消費するすなわち一過性の流行として捉えて使用するのではなく、地域や受け手（の多様性）といった複数の文脈にアートを合わせながら根付かせていくための手法や視野を提供しようとしている姿勢は共通していたように思われる。

今回の両氏のご発表は、鹿児島大学法文学部で蓄積されてきた研究成果や知見に眼

を向ける目契機ともなるのではないだろうか。やさしい日本語やアートマネジメント、アートと社会教育などについては、本学部で一定程度以上の成果や知見の積み上げが存在する。これらに目を向けることは、地域における大学の位置付けの再考・評価、研究成果と地域の活動との相互作用の確立に繋がるだろう。





鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター 地域シンポジウム  
いま水俣病を考えると 鹿児島の水俣病を撮りつづける写真家との対話

理学部物理・宇宙プログラム 助教 中川 亜紀治

2023年12月2日（土）、鹿児島大学にてシンポジウム「いま水俣病を考えると 鹿児島の水俣病を撮りつづける写真家との対話」を開催しました。2時間半のシンポジウム参加者は80名を超え、本学の様々な学部学生さんの参加もありました。

水俣病は高度経済成長期に熊本県と鹿児島県で起こった社会的事件です。発生から70年が経とうとする現代においても、水俣病は私たちに様々な課題を投げかけ続けています。本シンポジウムは、写真を切り口に、水俣病をいまに伝える意味を市民と共に考える場となりました。

前半では理学部物理・宇宙プログラム中川亜紀治が「水俣病のおさらい」と題して講話を行いました。水俣病は幅広い世代がすでに公害として学んだ経験を持つためか、多くの方が理解したつもりになっているのではないのでしょうか。講話では地理的・歴史的観点から鹿児島と水俣病のつながりを紹介し、時系列で水俣病の史実を整理することで水俣病を一からとらえ直す機会としました。

後半では写真家の小柴一良さん、南日本新聞の中野あずささんを迎え、法文学部地域社会コース農中至の進行による対話を行いました。小柴さんは1974年から水俣病の取材を始め、現在も出水や水俣を訪ねられています。会場には小柴さんの作品5点を組み写真の手法で展示しました。胎児性の男性患者と母親が見つめ合う姿と、その患者の右手を取めた写真。男性のその手は、彼の生涯で一度も道具として使われる場面が無かったゆえに赤子のような優しい形をしています。出水市の未認定患者が部屋で座り込む姿も展示しました。これらの写真

を対談の背景にしながら、モノクロ表現を大切にする小柴さんが今も追いつける「納得のいく水俣の写真」に対する考えなどを伺いました。対談では多くの参加者からも声上がり、登壇者とのライブ感あるやり取りが交わされました。発言には参加者それぞれの問題意識が現れ、水俣病問題を持つ多面性を示しているようでした。

最後は一般社団法人「水俣・写真家の眼」の奥羽香織さんから、写真を通して水俣病を伝える活動を紹介頂きました。奥羽さんからは「写真などの残されたものでしか水俣病を知る事はできず、一枚でも多く残すことが大切」、「未発表の写真には水俣の暮らしの息づかいが写りこんでいる」といった声をうかがいました。



## 平成時代の地方分権改革を振り返る

「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員教授 有馬 晋作

### はじめに

平成時代30年（1989年1月8日～2019年4月30日）の地方自治は地方分権改革が唱えられ、地方分権一括法の制定、三位一体改革、平成の大合併が行われ道州制論議が活発化するなど、「改革の時代」でした。しかし平成時代の最後には、改革の気運は著しく低下し、今や道州制の話も全く聞きません。

筆者は、「平成時代の地方分権改革を振り返る」と題し、みやぎ経済研究所（宮崎銀行設置）発行の『調査月報』2023年8～12月号に、5回シリーズで特集しました。地方分権改革は、まだ評価が定まらない部分もありますが、行政学・地方自治論を専門とする身にとっては、同時代的に歴史として記述することは重要と考え執筆した次第です。

本稿では、国政レベルで時代区分をして平成の地方分権改革の全体像を紹介します（本稿は特集を要約して紹介するものです）。

### 55年体制の崩壊と第1次分権改革

#### —1990年代—

現在、政治資金パーティーによる「政治とカネ」問題が、クローズ・アップされていますが、昭和天皇崩御で始まった平成時代（89年1月8日～）の最初は、同じくリクルート事件で「政治改革」が大きく注目されていました。このとき利益誘導型の政治が問題視され、それは国への補助金や許認可の権限集中、つまり中央集権が原因だとされました。

この「政治改革」と80年代からスタートした行政改革が合流したところで、地方分権改革が国政レベルの課題として浮上します。つまり、93（平成5）年の衆参両院での

地方分権推進決議です。同じく93（平成5）年の非自民・細川連立政権は、政治改革として政党交付金導入と、衆議院選挙への政権交代を可能とする「小選挙区比例代表並立制」導入を実現します。ちなみに政治学では、細川政権の成立は、55（昭和30）年からの自民長期政権、いわゆる55年体制の崩壊を意味する画期的な出来事とされます。

その後の社会・村山連立政権で、地方分権推進法が成立し、分権委員会からの幾つかの勧告を経て、99（平成11）年に地方分権一括法が成立します。これによって、従来、自治体事務の多くを占める「機関委任事務」、つまり自治体の首長を国の出先機関として扱う事務が廃止され、国と地方の関係が対等になりました。

### 小泉時代の分権改革

#### —2000年代前半—

劇場型政治で有名な小泉政権では、「3割自治」と脆弱だった自治体財政の税源を増やす三位一体改革（国庫補助金、地方交付税、地方税を同時に見直し）と「平成の大合併」が行われました。特に前者は、各省庁が抵抗しましたが、首相を議長とする経済財政諮問会議でトップ・ダウンで進められました。政治主導が発揮され、国民の評価も高かったです。ただ、このとき国の財政再建のための地方交付税の大幅縮小が、市町村合併が進んだ理由ともされます。

この平成の大合併で、約3300の市町村が約1700まで半減しました。住民は市町村合併で改革を実感しましたが、現在、旧町村の衰退が指摘されています。

### 民主党政権前夜の第2次分権改革

#### —2000年代後半—

小泉政権のあとは自民短命政権が続き、

このころから小泉時代の構造改革の負の側面といえる格差拡大などが問題視されました。その流れは、08（平成20）年のリーマンショックによる景気後退と重なり政権交代への流れとなります。このとき、「平成の大合併」の次は都府県合併という「道州制」論議も高まりました。

一方、地方分権改革は、国から県へ、県から市町村への権限移譲と、法令の実施基準の緩和、つまり自治体の自由度拡大が改革対象となりました。これが第2次分権改革といわれ、分権委員会から政府に勧告されましたが、その実現は次の民主党政権に委ねられました。

### 民主党政権での地域主権改革

#### —2010年前後—

生活第一を公約に掲げ、09（平成21）年12月に民主党政権が発足します。民主党政権は、前述の第2次分権改革を、ある程度実現しました。一方、自民の地方分権改革は遅々として進まないと批判し「地域主権改革」を唱え、現行の地方自治法を抜本的に見直す「地方政府基本法」の制定や住民自治充実を目指しました。つまり高い目標を掲げましたが、10（平成22）年夏の参院選の民主敗退で「ねじれ」国会になり実現できませんでした。

結局、東日本大震災や福島原発事故への対応のまずさもあって、国民の期待は失望に変わり、12（平成24）12月に、民主から自民へ政権交代をして安倍政権となります。

### 安倍長期政権での地方分権改革

#### —2010年代—

平成時代最後の安倍長期政権（12年12月～20年9月）は、アベノミクスや力強い政治（安倍一強）が話題となりましたが、分権改革には積極的でなかったようにみえます。

それは、従来の法律に基づく分権委員会による勧告ではなく、自治体からの要望を

受けて検討する、いわゆる「手上げ方式」に変更したからです。そのためか、改革内容は、第1次、第2次に比べスケールが小さくなりました。

また盛り上がった道州制論議も、合併での旧町村衰退をみた自治体の反対で見送ることになり、道州制論議も今や全く聞かなくなりました。

#### おわりに

#### —なぜ分権改革の気運は低下したのか—

近年、霞が関で、「地方分権改革は幕引きですか」とよく聞くそうです。全国首長（自治体）アンケートをみると、半数が分権の必要性を感じず、自治体の規模が小さいほど必要性を感じなくなります。法令の基準緩和や権限移譲も、自治体の負担が大きくなるのが理由だといわれます。長く続いた行政改革によって、財政的にも人員的にも余裕がないようです。むしろ現在の最重要政策は、人口減少対策になっています。

以上、一気に平成時代の地方分権改革を振り返りましたが、興味ある方は、前述の筆者の特集をお読みください（参考文献も本特集を参照してください）。

## ポツンと篠原國堅の墓

「鹿児島近現代」教育研究センター 客員研究員 友野 春久

「ポツンと…」というテレビ番組が人気らしい。衛星写真で日本各地の人里離れた一軒家を捜し出し、テレビスタッフがその地を訪れ、居住者の人間模様を紹介する番組である。

鹿児島市営郡元墓地にポツンと苔むした個人墓が建っている。ここ数年、掃苔の際に気にかけていた高さ1m程の墓である。小さい造花が手向けてあるものの、墓域内は背の高い草に覆われており誰も観ている様子はない。墓全体の写真を撮り、刻まれた文字をパソコンに落とし、この被葬者を調査することにした。正面に「篠原國堅之墓」、他の面に明治三十九年一月七日生、昭和十一年九月十七日死、行年三十一歳、また裏面に篠原静子・昭和十二年十月二十七日亡・三歳と読める。

明治10年西南戦争時、薩軍一番大隊長篠原冬一郎國幹も通字に「國」を使っているの、この家との関係を調べたが今のところ判明していない。

調査を進めていくうちに「篠原國堅」は明治45年4月、鹿児島県立女子師範学校附属小学校に入学。在校中に、昭和の初め「生命の綴方教授」の主唱者として著名な、同校訓導田上新吉（1889生～1945没）との出会いを知った。これが國堅の俳人としてのスタートである。田上は大正6年9月に広島高等師範学校附属小学校訓導として転任、國堅は6年生の時に鹿児島駅で田上を見送っている。後広島の田上与俳句について手紙のやり取りをしているので、その一部を紹介しておこう。

御手紙を有難く拝見しました。おかはりもありませんさうで、結構にぞんじます。これから時々俳句を書いておくりますか

ら、なほして下さい（鹿児島 篠原國堅）。

蔓枯れし朝顔の種子とる秋のまひる  
山茶花の鉢庭に出す晩秋の草取り  
箒握る朝の露手拭にてふき取る

國堅少年から手紙数通を受けた田上は、「篠原君は私が鹿児島にいた時分の生徒であります、これは私が広島へ来た年に貰ったものであります。俳句は所謂、“新傾向”の行方によったもので、季題とか調子とか舊來の約束に従って居りません。作者の生活から生まれた尊い感激の結晶である点に注目」（『鑑賞読本』大正13年）と評し、その非凡な才能を感じ新興俳句を予見している。

篠原國堅は父政治（医師）と母あさの次男として鹿児島市池之上町91番に生まれ（『篠原鳳作』）、姉5人、兄1人、弟1人（3歳で夭折）がいた。小学校卒業後、鹿児島県立第二中学校、第七高等学校造士館文科甲類、昭和4年3月に23歳で東京帝大法学部政治学科を卒業した。東大在学中の昭和3年「ホトトギス」に雲彦の俳号で投句し初入選している。卒業時の昭和4年は米国に端を発した世界恐慌の影響で日本経済も危機的な状況にあり、東大法卒の学歴も効果なく職を得られなかった。また体が弱かったため帰郷したともいわれ、この頃から俳句に本格的にのめり込んでいく。同6年鹿児島市で「天の川」支部を創設したのち、同年3月沖縄県立宮古中学校教諭に赴任し、公民・英語の科目を担当。季節感のない亜熱帯の宮古島で未踏・雲彦のち鳳作（ほうさく）と号し、この時から沖縄の風土をふまえた“無季俳句”を句作、昭和8年「傘火」を創刊し、横山白虹・西東三鬼らを迎え新興俳句を推進した。約3年間の宮古中

学校勤務の後、昭和9年2月に母校第二中学校へ赴任する（『会員名簿』二中・二高女・甲南高）。二中ではもの静かで温和な教師と知られ、句作では批評を謙虚に聞く人柄であった。教職の傍ら吉岡禅寺洞（福岡県）に唱和し無季俳句運動を積極的に推進し、雑誌「馬酔木」（あしび）と論争した時期もあったが、後世俳壇史に名を残すことになる。

同10年、衆議院議員・鹿児島銀行頭取を勤めた前田兼宝4女秀子（大正2年11月生）と結婚する。しかし同11年9月17日加治屋町で亡くなったという。盟友の西東三鬼は、あまりにも早い逝去に追悼句「葡萄あまししづかに友の死をいかる 三鬼」と詠み、吉岡禅寺洞は「鳳作君は毎年一度か二度は必ず訪ねてきて、泊まってくれた。彼を“内心に覇気を有する牛のような人”だと私たちは云っていた。あの鹿児島人特有のアクセントが、頭から一生離れないであろう」と云い國堅を送った。

この亡くなる前の様子を淵脇 護は著書『かごしまの俳句』に次のように書いている。「昭和11年長女静子誕生（1年後死亡）。5月ごろから首筋の痛みを訴え、妙見温泉等で治療したが、快方に向かわず発作的な嘔吐をみるようになった。9月病状急変、医師も間に合わず心臓麻痺で逝去、30歳。昭和12年長男正義、前田家で誕生」。

この記述から墓碑銘の「静子」は國堅娘であることが分かった。妻秀子の実家前田兼宝家はこの時下荒田町45番地にあるので（『官報』第3038号、昭和12年）長男正義はこの地で生まれている。故人の死因を究明するのは如何なものかと思うが、知人の医師に前記症状を示したところ、本人を診たわけではないので医学書的な推測との前提で次の回答を得た。「首筋裏の痛みなら脳動脈瘤などの脳圧亢進による嘔吐、脳動脈瘤破裂による突然死の疑いあり。心臓麻痺

=心臓が止まった状態の発見だから心臓が原因ではないと考える」。つまり頭の中の血管に瘤があって、これが頭蓋骨内の脳を圧迫、神経が押されて首の痛みと脳内圧亢進による嘔吐、血管の瘤が弾けて亡くなったという解説であった。

郡元墓地は市中心部の南林寺墓地廃止に伴う墓石移転先の一墓地で、大正8年3月1日に開設された。掃苔中に「大正8年南林寺墓地より改葬」と刻した古い墓に出会う。墓地開設17年後の昭和11年9月以降に國堅の墓は建てられたことになる。しかし家族の篠原家墓は周囲に見当たらず、主題にみるように「ポツン」と建っている。何とも不思議な光景である。

前述のように昭和6年宮古中学校に勤務した國堅の功績を称え、宮古島市南西の丘陵地鎌間嶺公園に鳳作の句碑が建立されている。昭和47年11月20日に秀子未亡人、遺児の正義、俳句会多数の出席のもと除幕式が行われた。また指宿市長崎鼻にも建てられている。

ここで國堅の家族について触れておこう。父政治は鹿児島県士族で安政2年（1855年）6月15日生まれ。『日本医籍録』大正15年出版に「従来開業」とみえるので古くから医業に携わっており、熱心なキリスト教信者でもあった。明治10年西南戦争時は21歳になり、薩軍として従軍し医療活動に従事していたのかも知れない。

政治は昭和11年発行『鹿医誌』物故会員中に名がみえる。國堅と没年は同じだが「父82歳にして昇天す」（『現代俳句集』昭和32年）と書いているので政治が先に亡くなっている。

兄は國彬といい、明治35年10月15日生。大正11年県立第二中学校を経て東京歯科医専に学び昭和2年に卒業。東京などで3年間研修した後同6年宮古島赴任、翌年平良町西里250番地に歯科医院を開院した。妻光

柄は明治42年生、長男壽宏は昭和9年生（『沖縄県人事録』）。宮古島での開院は弟國堅が宮古中学校勤務であったので、この事も関係していると思われる。戦争中の昭和20年1月鹿児島市に引揚げ、同22年9月上荒田町91番地（現荒田1丁目）で再開院しており、現在も同地に篠原歯科医院は続いている。

筆者はここまで墓碑銘、資料をもとに國堅の経歴・事績と家族について述べてきた。しかし疑問を感じる記述資料もあるので記しておきたい。

いくつかの資料は誕生地を「池之上町91番地」としている。この番地の土地所有者を調べるため鹿児島地方法務局所蔵「旧土地台帳」池之上町全地番に篠原姓を捜した。ただ、篠原家が当時他人名義の宅地に住んでいたとなるとこの手法は使えない。調査の結果91番地に篠原はみえなかったが、同町内に篠原政治が所有の宅地6筆、原野1筆がみえた。この宅地すべては市立玉龍中・高校正門前の道路を隔てた現在の池

之上町14番から21番街区に集中している。最も有力な出生地は國堅誕生時に父政治が旧来から所有の池之上町113番地、宅地95坪（「旧土地台帳」）現在地同町14番街区であろう。ここで注意したいのは、前掲「91番地」は明治19年式戸籍の本籍地表示の屋敷番号「91番戸」ではないかと考える。明治31年式戸籍に至るや本籍地表示に居住地「地番」が用いられた。つまり屋敷番号「番戸」と土地地番「番地」は必ずしも一致しない。

また一部資料に生年を明治39年10月29日、享年29歳。没日を9月11日、さらに年譜を元に明治38年10月29日生まれが正しいという、とする資料もある。墓は後世まで残るものであり、遺族が生没日・享年を間違えることは考えにくく、筆者は墓碑銘の刻字を信じたい。鹿児島市は無縁墳墓の撤去整理を進めており、87年前に建ったこの墓はいつまでこの地にあるのだろう。

いずれにせよ國堅は池之上町に生まれ、無季俳句を提唱実行した旗手であった。

## 鹿児島市小松原2丁目10番1号の歴史断章

—カトリック学校をめぐって—

「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 永山 修一

### 1

鹿児島市小松原2丁目10番1号は、現在学校法人ラ・サール学園の所在住所となっている。その土地は、昭和初年の段階では鹿児島郡谷山町塩谷字宮ノ前990番地、1958年市制施行以降谷山市塩屋町字宮ノ前990番地、1967年4月谷山市と鹿児島市の合併以降鹿児島市谷山塩屋町990番地、1981年の住居表示変更以降冒頭の地番となった。

1928年8月、この土地をフランシスコ会の米川基神父が購入した。この米川基は、カナダ国籍のカリキスト・ジェリナの帰化名である。この小文を、1921年のフランシスコ会と米川基神父から始めることにしたい。

### 2

1921年、ローマ聖座は、鹿児島・沖縄両県をパリ宣教会に代えてフランシスコ会カナダ管区に移託することとし、翌年6月、フランシスコ会のモーリス＝ベルタン神父が鹿児島宣教区長として奄美大島の名瀬に着任し、地区本部を置いた。また、米川基神父も奄美に着任した。このころ、奄美大島の識者の中に、高等女学校の設立を求める声があり、教会は文部省に高等女学校設立認可の申請を行い、1924年4月、教会立として大島高等女学校が開校した。初代の校長には米川基神父が就任し、実際の運営は、いずれもカナダ系の無原罪聖母宣教女子修道会、1933年以降は聖名修道女会が担った(平山久美子2007)。

1927年、ローマ聖座は、鹿児島宣教区を鹿児島知牧教区に昇格することとし、教区長館は奄美大島の名瀬から鹿児島市薬師町30番地に移された。フランシスコ会の資料(平秀應1988)によれば、1928年8月17日

「エジド・ロア教区長、鹿児島市小松原の島津別宅を購入、教区長館を薬師町より移す。聖アントニオ修道院と命名」とある。次に、この小松原の土地購入について見ていくことにする。

### 3

小松原の土地を購入したフランシスコ会が、島津別宅を購入したとしていることから、ラ・サール学園の周年誌もそれを踏襲してきた。しかし、1951年にラ・サール学園に着任した大友成彦修道士に対して2007年に行われた聞き取りでは、修道院は今の市電の社長の屋敷であったという話も出ていた。

さて、この付近の土地利用について見ると、幕末維新期には、中塩屋の集落、塩釜神社、是枝千亀の屋敷、射場山、煙硝倉、玉里別荘などがあった。玉里別荘は、島津久光が第二子の島津忠済(1855～1915)のために建てたもので、忠済と久光夫人の田鶴子が住んでいた。建物は平屋瓦葺60坪であるが、その周囲約3万㎡には松が植えられた。小松原という地名はこれによってつけられたものと言われている。

小松原2丁目10番1号の登記簿を見ると、1920年4月久保ハマという人物がこの土地を買得している。久保ハマは、鹿児島電気軌道株式会社の社長を務めた久保熊彦(松方正義の甥)の親族と考えられ、大友成彦修道士の言葉を裏付けるものである。鹿児島電気軌道は、大戦景気の中でカーボランダム事業に乗り出したが、これが会社全体の業績を悪化させ、久保熊彦は、社長を退いて相談役となった。1927年の金融恐慌によって、鹿児島電気軌道は経営難に陥り、同年極秘裏に鹿児島市へ売却することが決

まり、1928年7月鹿児島市電が発足した（鹿児島市交通局1958）。社長宅は、1928年7月競売にかけられており、これを買得した鹿児島県農工銀行が翌月米川基に売却した。同月、フランシスコ会は、教区長館を同所に移した。1930年、谷山には聖アントニオ修道院（現ラ・サール学園ブラザーハウス）が竣工し、翌年には教区神学校が開校した。

#### 4

奄美大島では、1923年古仁屋に奄美大島要塞司令部が開設された。同年、名瀬の高千穂神社への参拝を拒否したカトリックの大島中学校の2生徒が放校処分となり、1926年には米川神父が奄美大島要塞司令部の機密地図を入手し某国のために持ち出そうとしたという疑惑が喧伝されるなど、カトリックに対する圧迫が起こっていた。1929年10月大島高女が伊勢神宮の式年遷宮の遙拝を行わなかったことが問題となり、1930年4月鹿児島県は米川神父の校長罷免を通達した（宮下正昭1999）。1933年9月名瀬町議会は大島高女の廃校を決議し、鹿児島県大島郡私設町村長会は、大島高等女学校の認可取消に関する陳情書を、文部大臣鳩山一郎・外務大臣広田弘毅宛てに提出している。1934年3月に大島高女は廃校となった。なお米川神父は、1932年・33年の時点で要注意宣教師として、長崎・熊本県知事から内務大臣・外務大臣や警視庁・北海道・大阪・愛知・兵庫・岡山・福岡・鹿児島の長官宛てにその動向が報告されている（アジア歴史資料センター DB）。

1933年12月文部省は聖名（サン・モール）修道女会による聖名高等女学校の設立申請を認可し、1934年4月鹿児島市上荒田の仮校舎で開校された。22名の生徒が大島高女から聖名高女に転学したという（宮下正昭1999）。9月には紫原中腹の本校舎で授業を開始した。これに対し、1934年12月、明倫

会鹿児島県支部が、「聖名高女を中心としてカトリック教の国際スパイ嫌疑極めて濃厚なり」という決議文を県知事に提出し、カトリックへの排撃の動きが強まった（鹿児島純心学園1993）。奄美でのカトリック排撃はさらに激しさをまし、同年奄美から外国人聖職者は引き上げた。同年、フランシスコ会は、鹿児島市のザビエル教会内に聖フランシスコ修道院をつくる一方、登記簿によれば、谷山の聖アントニオ修道院の所有者である米川神父の住所は、1934年5月22日に東京市大森区田園調布に移転している。田園調布には、フランシスコ会の修道院が設立されていた。その後、1936年6月米川基神父から鹿児島教区天主教宣教師社団に鹿児島の全財産が寄贈され、鹿児島で活動していた多くの修道会は鹿児島を去り、鹿児島教区は邦人の手に委託されることになった。1937年2月聖フランシスコ修道院は閉鎖された。

『谷山市誌』は、谷山小松原の遊休資産の活用のため女性の独身信徒数名により育児施設「白菊寮」が開設されたとする。しかし、1936年にフランシスコ会がカナダの本部に宛てて行った報告によれば、1934年に谷山の建物に「幼稚園」が併設され、谷山の信者がその仕事に当たっており、冬の間は欠席者が多いが、夏のよい天気の日は、近くの4つの部落から80人以上の子どもが来るといふ（山下眞二氏（カトリック鹿児島司教区本部）のご教示）。したがって、1936年にフランシスコ会が鹿児島から退去した後も、谷山の信者が育児施設を継続したというのが実態であろう。1938年11月七田和二郎神父が長崎の五島列島の浜脇教会から谷山の小松原仮教会（現在のラ・サール）に着任した。『谷山市誌』は、小松原の育児施設は、1939年「光の園修道会」を招いて事業が継続されたとするが、この修道会については、特定できていない。1933年



フランシスコ会のガブリエル神父が指導にあたって鹿児島でつくられた「お告げのフランシスコ姉妹会」である可能性はあるものの（諏訪勝郎氏（ラ・サール学園講師）のご教示）、これは、1938年5月に本部を鹿児島市から東京に移している（社会福祉法人お告げのフランシスコ姉妹会 HP より）。

## 5

1939年9月第2次世界大戦が始まった。1940年7月に第2次近衛文麿内閣が成立すると、9月には北部仏印進駐を行って、米・英・蘭・中との対立を深め、日独伊三国同盟を結んで枢軸国を形成し、連合国と対峙していった。鹿児島教区長は聖名高等女学校を長崎純心高等女学校を経営する邦人の女子修道会に移管することを命じ、8月カナダ出身の聖名修道女会の修道女たちは本国カナダに引き揚げ、翌年正式に鹿児島純心高等女学校が発足した。

1944年6月、鹿児島県は県立医学専門学校の用地として、紫原の純心高女校舎敷地を強制買収した。『谷山市誌』は、「当惑した教会は育児施設を放棄してこの地に純心学園をうつした」としている。1945年3月頃から、海軍の命令で製塩作業が始められ、卒業生は、谷山の田辺航空工業株式会社の工場に報国隊として奉仕した。また3年生は小倉の兵器工場に動員された。

## 6

空襲によって鹿児島市の教会は焼失し、ただ一つ残っていた小松原教会の出口一太郎教区長のもとに、1946年七田和三郎神父が復員し、翌年にはザビエル教会の再建が始まった。小松原では1947年4月、鹿児島純心中学校が開校し、翌1948年4月には新製の鹿児島純心女子高等学校が発足した。同年6月、戦時中に強制買収された紫原の校舎が外国資産として認められ、その返還について鹿児島県との間で話がまとまり、9月に純心中学・高校は小松原から紫原に

帰った（鹿児島純心学園1993）。

1949年はザビエル来航400年にあたり、1949年5月29日から6月12日まで日本各地で公式式典が行われた。ローマ教皇特使ノーマン・ギルロイ枢機卿（オーストラリア・シドニー大司教）を団長とする巡礼団は、5月31日ザビエルの聖腕とともに鹿児島に到着し、重成格鹿児島県知事・勝目清鹿児島市長らも出迎えて盛大な行事が行われ、再建されたザビエル教会聖堂の祝別式・献堂ミサが行われた（松山ちあき2007）。これより前、鹿児島教区はザビエル来航400年の記念事業として、①児童養護施設、②幼稚園、③男子普通高校の設置を計画していった。①は愛の聖母園（善き牧者愛徳の聖母修道会により谷山の田辺航空工業跡地に1949年設立）、②はザビエル幼稚園（ザビエル教会内、1950年開園）、③はラ・サール高等学校（ラ・サール修道会により1950年開校）に結実する。

③について述べると、鹿児島教区では、カトリックの女子校があるのに男子校がない状況に対して男子校を求める声があった（諏訪勝郎氏のご教示）。1948年上京して大司教に男子教育の修道会の鹿児島誘致への協力を要請したがうまくいかず、訪れた田園調布のフランシスコ会修道院で偶然出会ったラ・サール会の修道士に鹿児島での学校創設を懇請した。7月鹿児島教区長から正式にラ・サール会宛の要請が届き、ラ・サール会は遠距離のため受諾できない旨の回答を行ったが、翌1949年には七田和三郎神父が仙台を訪れて、鹿児島教区の希望を熱心に説いたことで、ラ・サール会は鹿児島での開校を10月に正式に受諾した。学校用地は、鹿児島純心が所在した小松原の校舎であり、11月21日に鹿児島県知事宛に提出したラ・サール高等学校の設置認可申請書に対して、翌22日に鹿児島県知事重成格によるラ・サール会理事長マルセル・

クーリッシュエ宛の認可証が出された。1950年1月15日の南日本新聞にはラ・サール高校の開校告知記事があり、岩切重秀（鹿児島市議会議員）、田辺健吉（新生工業株式会社社長、もと田辺航空工業社長）、岩崎與八郎（岩崎産業株式会社社長）、増田静（鹿児島県議会議員）、勝目清（鹿児島市長）、松元仁一郎（谷山町長）、勝田信（鹿児島商工会議所会頭、鹿児島銀行頭取）、松村鉄男（弁護士）、重成恪（鹿児島県知事）、有馬純次（鹿児島大学教育学部長）の10名がいわば推薦者として名を連ねている。当時の鹿児島の政界・財界・教育界などのトップのラ・サール開校への期待の大きさがわかる。このころ、GHQが推し進めた民主化教育の中で鹿児島では1948年以降、男女共学（併学）・小学区制が導入されていた。

ラ・サール高校の開設に動いた政財界などの人びとの中では、ザビエル来航400周年記念事業はあくまで大義名分にすぎず、占領政策に縛られないエリート主義的な男女別学校の建設が当初から企図されていた可能性があり、保守エリート層の戦後教育への不満を解消する受け皿としての役割を果たしていたという。そのため、他地域で多く見られる男女共学に対する反対運動が鹿児島県では見られなかったという（日高利泰2021）。

『谷山市誌』よれば、玉里別荘は民間に譲られて土屋某の所有となっており、開校後の一時期ラ・サール高校生の寮となっていて、20年ほど前に解体された。1954年、ラ・サール会のブラザーハウスとして利用されていた旧久保邸が焼失した。こののち、校舎として使われていた建物が聖堂・ブラザーハウスとして使用されることになった。1930年に建てられたこのブラザーハウスも、老朽化のためまもなく建て替えられることになっている。

## 参考文献

全般的に

アントニオ平秀應修士編1988『宣教師たちの遺産・フランシスコ会カナダ管区』フランシスコ会アントニオ修道院

奄美宣教100周年記念誌編集部1992『カトリック奄美100年』奄美宣教100周年実行委員会

諏訪勝郎2021「奄美大島の信仰—福音を生きる—」1～18「カトリック新聞」2021.7.18～11.28

田辺徹1989～1993「この百年①～④」『鹿児島カトリック教区報』第283号～第322号、カトリック鹿児島司教区

ラ・サール会1981『道のり—日本ラ・サール会略史—』2012年に函館ラ・サール学園同窓会が復刻

個別的に

鹿児島市交通局1958『鹿児島市交通局30年史』鹿児島市交通局

鹿児島純心学園創立六十周年記念準備委員会編1993『創立六十周年記念誌』鹿児島純心学園

谷山市誌編纂委員会編1967『谷山市誌』谷山市、鹿児島市 HP で閲覧可能

永山修一2021「中塩屋・小松原の歴史」『70周年記念誌』ラ・サール学園

日高利泰2021「鹿児島県下における男女共学制の定着—私立男子校新設による円滑化」小山静子・石岡学編『男女共学の成立—受容の多様性とジェンダー』六花出版

平山久美子2007「大島高等女学校廃校問題の一背景」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第37号

松山ちあき編2007『聖堂再生』NPO 法人文化財保存工学研究室

宮下正昭1999『聖堂の日の丸—奄美カトリック迫害と天皇教』南方新社

## 『大正三年1914 桜島大爆発の思出集』について

「鹿児島近現代」教育研究センター 客員研究員 林 匡

本稿では、筆者が『近現代センター通信』第2号に掲載の「忘れられていく学校の記録」で紹介した、旧県立鹿児島西高等学校（定時制夜間・昼間課程、通信課程を有し

た。）関係の資料（現在、県立明桜館高等学校保管）から、標記の『桜島大爆発の思出集』（鹿児島西高令者学級、1972）の概要を紹介する。（以下の表、巻頭言は除く。）

No.	イニシャル	生年	西暦	文章題	爆発当時場所	本人の状況など
1	A Y	M31	1898	(無題)	女子興業高鹿児島市上竜尾町	上ノ園町にあった女子興業高一年生。学校から帰宅、津波の噂、上竜尾町から鹿児島駅を経て西市来へ避難。
2	N S			(無題)	県立二高女鹿児島市仲町	山下町にあった県立二高女から帰宅、自宅からまず玉里邸御用人部屋へ避難、さらに伊敷街道を小山田へ避難。
3	H A	M35	1902	桜島大爆発の体験記	大田小日置郡阿多村	阿多村（のち金峰町）大田小五年生。麦畑で近所の人々と過ごし、さらに竹山の小屋で数日過ごす。
4	K T			博多のノゾキ	福岡県博多	当時6歳、博多市内で降灰を体験。
5	O T	M35	1902	ベスピアスと比べて	県立女子師範附属小鹿児島市照国町	山下町の県立女子師範附属小五年生。照国から小野に一時避難、津波等のデマ。伊集院を経て日置郡へ。灰よけのセルロイドメガネが流行したことなど。
6	N K			桜島の爆発		当時7歳の祝いをした数日後のこと。伊敷の先の幸加木神社まで避難。
7	N S	M38	1905	名山小学校にて	名山小鹿児島市堀江町	市庁舎の前にあった名山小学校（東隣が商業学校）二年生。田上から津波を避け伊集院方面に移動、「まん頭石駅」（上伊集院駅）で乗車、伊集院へ避難。
8	E N	M36	1903	西田小にて	西田小鹿児島市常盤町	西田小学校児童。十二日夜は外に戸板を敷く。
9	I T	M24	1891	明石市に於て	明石市	所用で明石市に。号外で「鹿児島は全滅、汽車も電信も不通」とありショックを受ける。家族は坂元町に避難。
10	W W	M41	1908	瀬々串にて	指宿郡瀬々串	地震後外で野宿。津波のデマ、地割への警戒。
11	O K	M35	1902	伊集院の岡から	県立女子師範附属小鹿児島市金生町	県立女子師範附属小五年生。武の岡下へ一時避難、地震後津波を避け、伊集院をめざし西田橋を越え、水上坂を進む。伊集院石谷に到着。海岸に一面の軽石、降灰。
12	Y S	M41	1908	日当平にて	鹿児島郡伊敷村下伊敷	当時6歳、自宅近くに歩兵第四十五連隊の実弾射撃場があり、その中に茅葺きの小屋が建てられ、桜島の避難民の一部を収容。
13	O M	M32	1899	(無題)	始良郡溝辺村（地名玉利）	高等科二年生。加治木方面から津波のデマでの避難民
14	K H	M41	1908	赤フンドシ	鹿児島市吉野町	当時5歳。竹山に避難後、吉田村まで避難。1月12日は爆発記念日として講話、避難訓練を行った。
15	F Y	M34	1901	残留記	伊敷尋常高等小、鹿児島郡伊敷村上伊敷	飯山橋近く国道沿いに自宅。噴煙が毒ガスだとの噂。多くの人が今の国道3号線を、甲突川上流へ逃げる。
16	S T	M37	1904	(無題)	曾於郡志布志町帖	小学三年生。兄は鹿児島の獣医研究会から帰され、加治木・国分・岩川と遠回りして帰宅。志布志も軽石混じりの降灰。近所には桜島からの移住者もいた。

17	S K	M33	1800	伊集院石谷にて	市立高等小鹿児島市武町	高等小学校の授業中だった。噴火後城山に登る。その後帰宅、武岡の下に避難、地震後、西別府の西郷殿屋敷に行く。田上から伊集院町石谷に避難。
18	H K	M30	1997	竹ヤブにて	県立二高女	山下町にあった県立二高女三年生。伊敷に避難、地震後、竹藪で一夜を過ごし、犬迫へさらに避難する。
19	T T	M38	1905	桜島の裏側で	福山尋常高等小始良郡福山町	福山尋常高等小。県立二高女の姉も帰宅。重富駅辺りも桜島の避難民が大変だった。
20	O S			鹿児島市の中心山之口町にて		小学校入学前。海岸で見物し桜島からの避難者を見る。父は西田橋近くの馬車着場に馬車の予約に。郡山に避難するため伊敷街道を北上。夕方、郡山に到着。
21	S H			信州にて	松本小長野県松本市	東市来の鶴丸小学校生だったが父の転勤で長野県松本市へ。松本小四年生の時、1月13日に松本に降灰。六年生の時、父が退職し鹿児島に戻る。
22	K M	M43	1910	桜島大爆発の思い出		出生地は鹿児島県外のため、知人S T氏（M41生、鹿児島市冷水町）から当時の思い出を聞き記載。伊敷小からさらに津波がくるとの噂で伊集院に避難したという。
23	M D			桜島大爆発追想記	熊本市外本山村	九州通信局附属電信学校生。生家は大隅南部。爆発翌日の号外で知る。当時の鹿児島郵便局は現鹿児島東郵便局にあった。石造2階建てだが地震で倒壊。
24	M T	M34	1901	墓地にて	海岸通り（米屋）	武駅から串木野へ避難。12日午後6時の地震時墓地。
25	H K	M42	1909	比志島にて	鹿児島郡伊敷村比志島	竹山で生活、桜島避難民も一時避難し、さらに遠方へ。
26	N T	M41	1908	加世田市万世町にて	川辺郡東加世田村小松原	当時7歳、小学校入学前。12日夜は地震を警戒し屋外に出て休むよう注意あり畑へ。
27	S T	M35	1902	桜島の方とともに	鹿児島郡伊敷村飯屋	小学校から家に帰る。父を残し郡山の山中に避難。父は村の組長をしていたので自宅では桜島からの避難民を一時受け入れ。母方の祖父を石垣倒壊で喪う。
28				大正三年の鉄道		大正2年10月鹿児島駅から城山トンネルをぬけて鹿児島本線が東市来まで開通したことなど記載。
29	E S	T3	1914	士魂		桜島爆発当時父は台湾。伯母は谷山へ避難中、二軒茶屋で18時の大地震に遭遇、間一髪で崖崩れに遭わず。
30	S T	M37	1904	桜島よりの移民（志布志）		志布志の三年女子組にも桜島小から転校生五・六人を迎える。友だちになった家の商売のことなど記載。
31	K H	M41	1908	カツボレ	鹿児島市新町（港の近く）	数えの7歳、岸壁に桜島からの避難民が続々上陸。その後高麗町へ。津波の噂で田上の高台に避難。

表に示したように、ここには爆発当時の場所、在籍した学校と学年や地域、爆発後の避難行動や当時の人々の状況、デマなどが具体的に記載されている。大正3年の桜島爆発については、例えば『桜島大正噴火100周年記念誌』（桜島大正噴火100周年事業実行委員会、2014）第2章「大正噴火」の第2節「被害」、第3節「避難」、第4節「移住」にまとめられるとともに、第6節「見聞

記抄」には私家版を含む6編が収録されている。この『桜島大爆発の思出集』には、爆発当時鹿児島市内や周辺（旧伊敷村など）で経験したものが多いが、その他に旧日置郡阿多村や川辺郡東加世田村、揖宿郡瀬々串、始良郡溝辺町や福山町、曾於郡志布志町、その他県外でのことも記されており、避難の状況や当時の風聞などもうかがい知ることができる点で貴重であろう。一

例として、表中 No.12「日当平にて」を記す。

「爆発当時、私は六才であった。電燈はなく、ランプとカンテラの時代であった。一月十二日の午後六時、いろりの近くにさがっていたランプが、突如、ガチャガチャと音をたてて大ゆれした。日当平の裏山の頂上から、山をおおうようないきおいで、次から次へと噴煙がふくれあがって、のしかかってくるようないきおいで恐しかったことを覚えている。日当平には、そのころ、まばらな農家しかなく、十数キロ先へと離れているにもかかわらず、まるで裏山の火事のように思われた。

姉は、私をおんぶして、木戸へ走り出して、しばらく身を寄せたほどであった。ちょうど近くの平地に、歩兵第四十五連隊の実弾射撃場があった。幅百五十メートル、奥ゆき一キロもあった。手前の方に、百メートル毎に射撃をする台場が、五つほど高く築かれていた。一番奥に、標的に打ち込まれた弾跡を調べるごうがあり、私ど

もは、このごうをカンテッコと呼んでいた。ここの標的が、弾痕のため、板がぼろぼろとなるのを取り替え、それを修理更新するための標的（マト）修理工場という一軒の頑丈な倉庫が、わが家のすぐ目の下にあたるところにあった。私ども、子どもたちは、マトゴヤと呼んでいた。ここに、ひとまず、一家および近所の数軒が避難した。下伊敷の住民の大部分は、小山田、伊集院へ、小山田、伊集院の住民は、つき出されるように、更に申木野方面へ避難したという。

そのうちに、射撃場のどまん中に、長さ二百メートルほどの、茅ぶきのほっ立て小屋ができた。ここに、桜島の避難民の一部が収容された。命からがらで、体一貫で逃げてきた人々である。飲料水は、井戸水にしかたよるほかない当時、こうした難民たちは、食糧と同時に、飲料水に不自由したものであろう。桜島住民の中には、その後、日当平や中福良部落へ住みついた人もあったという。」

## 海音寺潮五郎文学における西南戦争 「鹿児島近現代」教育研究センター 客員研究員 吉満 庄司

### はじめに

海音寺潮五郎は鹿児島出身の文豪で、歴史を題材とした優れた作品を数多く残したことで知られている。特に、西郷隆盛の伝記については、ライフワークとも位置付け、昭和44（1969）年に新聞・雑誌から引退宣言をし、直木賞選考委員など一切の役職も辞任して『西郷隆盛伝』の執筆に精力を注いだ。

しかし、昭和52（1977）年に78歳で逝去し、『西郷隆盛伝』は未完のままとなった。もっと長生きすれば、当然完成をみる事ができたであろう。しかし、全ての仕事を断って『西郷隆盛伝』執筆に臨んでから亡くなるまで8年の歳月があったにもかかわらず最後まで書き切れなかった。明治維新後の西郷隆盛、特に西南戦争における西郷については、概説程度の作品はあるにせよ、海音寺ならではの重厚な伝記とはほど遠いものである。何十年もかけて西郷研究に打ち込んできた海音寺であれば、そして史伝文学の第一人者である海音寺の筆力をもってすれば、完成させるには十分な時間があっただろうと思われる。

そこで、小稿では「なぜ明治維新後の西郷隆盛、就中西南戦争における西郷隆盛について筆が進まなかったのか。」ということについて考えてみたい。

### 大口における西南戦争

海音寺潮五郎は本名を末富東作といい、明治34（1901）年、鉱山業を営む末富利兵衛の次男として鹿児島県伊佐郡大口村に生まれた。

その頃、西南戦争からわずか20年余しか経っておらず、まわりには西南戦争に従軍した人がたくさん健在していた。そして、

毎日のように西郷さんや西南戦争について話を聞かされた。『海音寺潮五郎全集』第十一巻の「あとがき」に「当時の薩摩には西南戦争に出たおじさん達が多数いました。ですから、その頃の薩摩の少年らは、その人々から西南戦争の話を聞き、西郷の話聞いて育ちました。（略）わたくしにとっては、西南戦争の話はイリヤッドであり、西郷の話はオデッセイだったのです。このごろになってわたくしは思うのですが、ひょっとすると後年わたくしが作家、それも歴史文学の作家となったのは、ここに因縁があるかも知れない。」と述べている。

また、海音寺潮五郎記念館が遺稿を整理する中で発見された「わが文学と故郷」という題の切り抜きには、「ぼくの生まれた所は、薩摩北部の大口市だが、ここは西南戦争のとき、激戦の行われた地だ。町の北に高熊という丘陵があり、その東方に坊主石という山があり、間を人吉街道がうねっている。人吉で敗れた西郷軍の一部がこの街道を退却してきて、坊主石に辺見十郎太が、高熊に池辺吉十郎のひきいる熊本隊が、防塁をきずいて南下してくる官軍を食い止めようとした。壘を奪われたり、奪いかえしたり、はげしい攻防戦が数日にわたってつづけられた。この攻防戦にまつわる話を、ぼくは幼いころからいくどとなく、またいくつも、おとなたちから聞いた。また、西郷軍として出陣していったおじさんたちから、いくさ話や陣中談をいくつも聞いた。これらの話は、子供の読みものとしては巖谷小波のおとぎ話くらいしかなかった当時の片いなかの少年であったぼくにとっては、もっともおもしろい小説であり、もっとも響き高い詩であった。ぼくは

呼吸をつめ、われを忘れて聞きほれた。後年ぼくが悲壮美を愛し、男性的気概に魅力を感じ、そんな作品を多く書く作家になったのは、ここにそのもっとも基本的なゆかりがあるのかもしれない。また、作家としての地歩を確保してくれたのも、このころに聞いた話を材料にして昭和12年ごろに書いて、いろいろな雑誌に発表した、およそ十編ほどの短編小説であった。この前年の夏、ぼくは直木賞をもらったが、この賞は当時はいまのように世間で大さわぎするものではなかった。ぼくの作家としての地歩を確立してくれたのは、直木賞ではなく、この十編ほどの短編小説であった。」と述べており、幼少の頃にまわりの大人から聞いた数々の逸話が、海音寺の作品の基となったことは確かである。

『南風薩摩歌』、『唐薯武士』、『柚木父子』、『椎の夏木立』といった大口における西南戦争を描いた代表的な作品は、いずれも当事者から直に聞いた逸話などを豊富に盛り込んで作品を構成しており、そこが海音寺文学の醍醐味と言えよう。換言すれば、西南戦争を経験した村の古老たちの体験談こそ、歴史小説家としての海音寺潮五郎の原点ということになる。

#### 太平洋戦争における陸軍徴用と大口疎開

昭和16（1941）年、太平洋戦争の開始に伴い、海音寺潮五郎は陸軍報道班員として徴用されマレーシアに派遣された。現地の人々に日本文化を紹介し、日本の戦争の目的を理解させるため、いわゆる「文化工作」が主たる任務で、小説家や新聞記者などがその任を負った。したがって、前線の戦場に駆り出されることはなかったが、現地で実際の戦争の悲惨さと不条理さを身を以て体験した。クアラルンプールに1年余り駐在したが、その間、気管支炎・胃痛・肺結核を患い、徴用満期で帰国後もチフスと診

断され入院を余儀なくされた。

昭和19（1944）には、戦況の悪化に伴い故郷の大口に疎開することとなった。大口には、戦後の昭和23（1948）年まで4年余滞在した。その間、ほとんど執筆活動は行わず、漢籍を中心とする読書に没頭した。また、西南戦争に従軍した人の残した陣中日記（従軍日誌）などを精読する生活を送った。そこには、少年時代にまわりの大人達から聞いた勇ましい軍功談ではなく、銃弾飛び交う負け戦の中、抗戦を繰り返す悲痛な姿も克明に記録されていた。

西南戦争従軍者の陣中日記を基に書いた『戦袍日誌』という短編小説がある。主人公の遠矢休之助は、年端もいかない2人の部下を戦死させてしまったことを悩み、その後自らも戦闘で亡くなる。作品の中で、「余ハ南洲翁ノ偉大ヲ知ル。ソノ心事ノ高朗ヲ知ル。ソノ憂国ノ衷情ヲ知ル。マタ、麾下将星ノソレヲ知ル。コノ戦ヒノ意義ヲ知ル。而モナホ二少年ノ死ハ、余ヲシテ闘ヒナルモノノ意義ヲ熟思スルコトヲ求メテヤマズ。」と海音寺は記している。そこには、戦争というものの凄惨さや無意味さを強く打ち出す姿勢がはっきりと確認できる。

大口は、高熊山激戦地に代表されるように、県下でも最も激しい戦闘が行われた場所であった。そして、そこで亡くなったり負傷したのは従軍した兵士だけでなく、飯炊きや荷物運びに動員された庶民も同様であった。家は焼かれ畑は荒らされるなど、今も昔も戦争の被害者は庶民だった。

また、大口郷の郷土年寄も務めた有村隼治は、政府軍に内通したと西郷軍に疑われ惨殺された。妻のスマも同様に殺害され、それと前後して大田甚太郎と園田助右衛門も有村の密使として政府軍に情報を流していたという嫌疑で殺害された。有村は、堀之内良眼坊とともに川内川開削工事の推進や、木崎溜池の構築など大口の産業振興に

尽力した指導者であった。藩と交渉し農耕用牛馬の費用を調達したり、大口郷の農業振興の守り神として戦国時代の武将・新納忠元を祭神とする忠元神社の建立も推進した人物である。こうした史実を基にして海音寺が執筆したのが『二本の銀杏』である。

### 海音寺潮五郎の葛藤

海音寺潮五郎は、敬愛する西郷隆盛の伝記を書くことに使命感を持っていた。海音寺がなぜ西郷の伝記を書くことにこれほどこだわったかについて、『海音寺潮五郎全集』第一巻掲載の「あとがき」で、「私が西郷の伝記を書こうと思いついたのは、私が西郷が好きだからです。その好きであるところを、世間の人々に知ってもらいたいと思いついたという次第です。」と述べている。また、「西郷は明治維新最大の功臣でありながら、後世の歴史家に誤解されている面が多々あり、そのゆがんだ西郷像が歴史知識として一般に定着してしまうことを避けるために、真の西郷像を書こうとした。」とも述べている。だからこそ、歴史の真実を明らかにする目的を持った史伝という形で西郷を描こうとしたのであろう。すなわち、西郷が好きで好きでたまらないということと、真の西郷像を描きたいというのが、西郷の伝記を執筆するようになった動機であった。

その最も敬愛する西郷が目指して実践した大義と、西南戦争の実態をどう整理すればいいのか、どう整合性を考えればいいのか、海音寺は大いに悩んだことだろう。そして、そこには太平洋戦争時にマレーシアに派遣され、そこで実際に体験した戦争の悲惨さや不条理さも大きく影響したと思われる。

『戦袍日誌』においても、西郷の憂国の情と戦いの意義を信じながらも、2人の少年の死を償うだけの意義があるのかと葛藤し

ている。補給豊富な官軍に対して、原始的な斬りみで戦うしかない西郷軍には、局地的な勝利はあっても劣勢を挽回する見込みはないということを分かっているながら戦い続ける主人公の陣中日記に、海音寺は自ら太平洋戦争で経験した戦争の愚劣さを重ね合わせたのかも知れない。

こうした葛藤が、文豪海音寺潮五郎を以てしても西南戦争における西郷隆盛を描ききれなかった最大の要因と考えられよう。

### 終わりに

これまで、西南戦争は西郷軍側から見た戦い、あるいは政府軍から見た戦いで語られることが多かった。

考えてみると、西南戦争50周年の頃は20歳前後で従軍した人々がまだ70歳くらいで存命であり、とても客観的に評価ができる雰囲気ではなかった。西南戦争100周年は、高度経済成長期を経て日本が急激な発展を遂げた時代で、それに乗り遅れないよう、「この繁栄する日本基礎を作ったのは我が郷土の英雄西郷隆盛とその他の鹿児島出身者である」ことを強調する風潮が強かった。したがって、西南戦争とは何だったのかということ客観的に考える状況ではなかった。

このような経緯を踏まえ、数年後に迎える西南戦争150周年に当たっては、地方の視点（特に戦場となった地域）や否応なく駆り出されたり被害を受けた庶民の視点も含めて、西南戦争とは何だったのかを複眼的にそして客観的に考え直す必要があるのではないだろうか。これこそが海音寺潮五郎が我々に残した課題なのかも知れない。



## 戦艦金剛主計兵米倉重夫と親族 ——米倉吉之助家の明治・大正・昭和——

日本美術家連盟会員 米倉 秀一

私は教職を退き10年以上が経ちましたが、4、5年前、太平洋戦争中、戦艦金剛に乗船し戦死した父方の伯父の手紙などが出てまいりました。その伯父と戦後生まれの私はまったく面識はありませんでしたが、小さい頃よりその伯父の写真など見る機会があり、心の中では身近な人でした。そのためか若くして死んだ伯父の手紙を親類、家族などに残せないものか、また後の世の研究者に少しは役立つものかと考え、素人ですがその作業をはじめ、また伯父の生きた時代というものも調べてみました。

学力のない一人だけの作業で、自分の仕事はこれでよいのだろうかと不安でしたが、南日本新聞で鹿児島大学の『「鹿児島近現代」教育研究センター』の存在を知り無謀にも戸をたたいてみました。丁度、同センター長の丹羽先謙治生がおられ、どこの馬の骨ともわからぬ私の「伯父の手紙関係の文」を笑顔で受け取っていただきました。

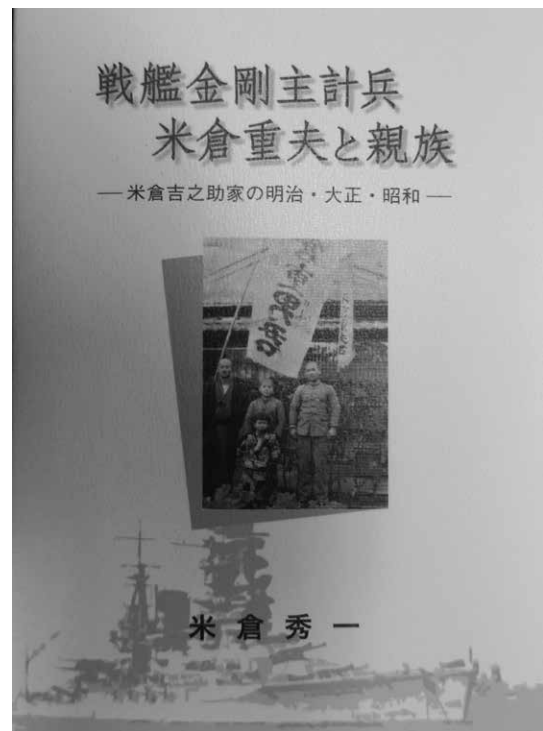
それからお忙しい丹羽先生に私の文の校正、校閲を長時間していただき、そこで私は自分の文の未熟さをさらに実感しましたが、また自分なりの研究も少しやってみようと刺激を受けた次第でもありました。それと同時に学問の奥深さ、また学問に携わる方の真摯な姿勢とその研究の深さ、広さに圧倒され驚かされました。

今回『「鹿児島の近現代」教育研究センター』並びにセンター長の丹羽先生と出会い御指導を受けることができましたことは誠に運の良いことでした。昔から自分は運だけで生きてきたと思っていましたが、今回はさらにそれを深く実感した次第です。また特任助教の中嶋晋平先生にも御教示を

いただき御礼申し上げます。

先生方のご指導と貴重なお時間のお陰で、誤りの多かった私の文は「戦艦金剛主計兵米倉重夫と親族」として何とか形にできそうな状態となり、これから完成を目指してもうひと頑張り致したいと思います。

貴センター並びに先生方には深く感謝をもうしあげます。



米倉秀一『戦艦金剛主計兵米倉重夫と親族——米倉吉之助家の明治・大正・昭和——』（2023年12月）

## 鹿児島近代文学 (3)

阿井景子「西郷家の女たち」

「鹿児島近代」教育研究センター 特任助教 鈴木 優作

西南戦争は一般に、薩軍の勇敢さとともに語られてきた。例えば、池波正太郎は『西郷隆盛』（人物往来社、1967年）において、「政府軍は薩軍の猛勇をおそれ、八個旅団の大軍をもって十重二十重の包囲網をめぐらし、むしろ薩軍の苦笑を買った。」と叙述している。また、司馬遼太郎「翔ぶが如く」（『毎日新聞』1972年1月1日～1976年9月4日）では、「熊本鎮台の兵士というものは、言わば土百姓、素町人の烏合の衆たるに過ぎないのであるから、いかにしても、剽悍なる薩摩隼人の向こうに立ちそうにもない」と樺山資紀中佐が回顧している。両作における女性は、「鹿児島の女たちが城山へやって来ては、食物や酒をはこんだり、将兵の洗濯までやった。」（『西郷隆盛』）、「この当時、旧幕の遺習として、宿場の旅籠には飯盛女とよばれる遊女が抱えられている。」（「翔ぶが如く」）とあるように、銃後で性的役割をこなす固有名のない集団として後景化されている。そこに男性／従軍者からの視点であって、女性／銃後の視点は不在である。

一方で、西南戦争を女性／銃後から描いたのが、阿井景子「西郷家の女たち」（『別冊文藝春秋』1986年10月）だ。阿井は鹿児島純心女子高等学校の出身である。本作は西郷家に仕えた女中よしの子孫・黒川ゆきえに取材し、西郷隆盛の妻いとを視点人物とした物語である。

以下、物語を追っていこう。薩摩では男子は忠誠を旨とする「士道」を、女子は「心を和らげ、辞をしとやかにし操を守る」「婦道」を叩き込まれる。幼いいとは「婦道」に従い、「男たちの志を大切に」することを学ぶ。西南戦争が始まると、政治から乖離

した立場にある女達からすれば、「いとや女たちに政情がわかるはずもな」く、男達に対して「ひたすら戦勝を祈」ることしかできない。しかし、戊辰戦争で斃れた西郷家の次男・吉二郎に続き、末弟・小兵衛が戦死する。四人の兄弟が戊辰戦争従軍時に「戦死を第一の功」と誓ったのに対して、「死は残された者にとってあまりにも悲しい。」「いととは男たちの戦いが恨めしかった。」といとの悲痛な思いが描かれる。

以下の記述を参照すると、戦は男の晴れ舞台、という認識は男たちに共有されていたのかもしれない。

戦国以来の習風の中にある薩摩人の多くは、何よりも戦いというものが、男子の一生にとっての唯一の晴れのものであるということが、政治上の是非善悪などとは無関係に、それを越えて信仰以上のものになっていた。（「翔ぶが如く」）

「西郷家の女たち」で男たちの戦いに恨みを投げかけるいとの見点は、戦争を描く文学における男性からの視点を相対化する重要な役割を担っているのではないだろうか。

「わたしたちが戦争について知っていることは全て「男の言葉」で語られていた。わたしたちは「男の」戦争観、男の感覚にとらわれている。男の言葉の。女たちは黙っている。」（スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著／三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』（群像社、2008年7月、原著1985年）というように戦争はジェンダー性が如実に顕現する事象であって、性的な視座を替えればその捉え方は変わってくるということだろう。

## 寄贈資料

山下真一『鹿児島藩の領主権力と家臣団』岩田書院（2023年11月30日、山下真一様より）  
『記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「種子島の盆踊調査報告書」』南種子町  
教育委員会・西之表市教育委員会（2023年12月6日、種子島開発総合センター「鉄砲館」  
様より）

『種子島の盆踊 DVD2』（同上）

『YES オノ・ヨーコ展』ほか28冊、朝日新聞社（鹿児島県霧島アートの森様より、2023  
年12月6日）

米倉秀一『戦艦金剛主計兵 米倉重夫と親族—米倉吉之助家の明治・大正・昭和—』  
（2024年1月5日、米倉秀一様より）

『佐賀学ブックレット』①～③岩田書院、④～⑩海鳥社（2014年1月16日、佐賀大学地域  
学歴史文化研究センター様より）

## 今後の予定

3月23日、奄美群島日本復帰70周年記念シンポジウム「豊穰の奄美—研究と文化の継  
承—」を開催します。

## 編集後記

今回は、8点のイベント記事と5名の客員教員・研究員の論考を掲載できました。内容が  
一層充実し、本誌は28頁に拡大しました。開所後一年半となる弊センターの活動も一層飛  
躍させていきたいものです。（須）

## 近現代センター通信 第3号

2024年3月1日

発行 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

〒890-0065

鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21-30

電話 099-285-7532

メール kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp

<https://kadai-kingendai.jp/>

奄美群島日本復帰70周年記念シンポジウム

# 豊穡の奄美

— 研究と文化の継承 —

日時 2024年 **3月23日(土)**  
10:20~16:45 (10:00開場)

参加無料

申込み不要

(入退室自由)

会場 鹿児島大学学習交流プラザ2F 学習交流ホール  
(鹿児島市郡元1-21-30)

奄美会場同時配信 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室  
(奄美市名瀬港町15-1 奄美群島大島紬会館6F)

第1部 奄美研究の  
過去/現在/未来  
10:30~12:10

「戦後奄美群島の社会経済の変容

— 開発と自立のジレンマ —

皆村 武 (鹿児島大学名誉教授)

「文化人類学/民俗学のなかの <奄美>」

町 泰樹 (鹿児島工業高等専門学校准教授)

オープンフォーラム

第2部 21世紀の奄美島唄  
13:30~16:45 — 伝統から何を受け継ぐか? —

「島唄の新世紀—伝統から未来へ」

梁川 英俊 (鹿児島大学教授)

「舞台から見る奄美島唄の変遷」

アノニ (鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科博士後期課程)

「奄美島唄の継承に創造は必要か?」

原田 敬子 (東京音楽大学教授)

コメント 酒井 正子 (川村学園女子大学名誉教授)

里 朋樹・歩寿ライブ

15:20~



お問い合わせ先

「鹿児島島の近現代」教育研究センター

TEL 099-285-7532 E-mail : kingendai.jim02@gmail.com



詳細は  
こちら

主催：鹿児島大学法文学部附属「鹿児島島の近現代」教育研究センター

企画協力：梁川英俊（鹿児島大学法文学部教授）